アクセント学習に加えたい観点 —中学校国語教科書におけるアクセント記述の実態から—

1. 研究目的

- 各中学校国語の教科書にみえるアクセント記述の実態を明らかにする
- 問題点を通して、新しいアクセント学習を進める際教師が押さえておくべき観点を提示・提案する

2. 調査対象

『伝え合う言葉 中学国語 I』	(教育出版) K社
『現代の国語 I』	(三省堂) S社
『新しい国語 I』	(東京書籍) T社
『国語 I』	(光村図書) M社

3. 日本語におけるアクセントの特徴

- 個々の語に、高低の韻律特徴がある
(高低アクセント)
例1 箸(高低) 橋(が)(低高(低)) 端(が)(低高(高))
- 語のまとまりを表す機能をもつ
(アクセント句【イントネーションと関わりも有】)
例2 この(低高) この橋(低高高高)
梅(低高) 青い梅の木～(低高高高高高) **まとまりの範囲を
考えさせられる**
青い梅の木～(低高低低高高高) 世界の言語
にもみられる
- 品詞毎にアクセントが決まっている
(品詞毎のアクセント規則がある)
例3 【動詞】書く(高低) 書かない(低高高高) 書いて(高低低) etc...
品詞毎のアクセントの仕組みを考えさせられる
(参照：日本語学会 [編] 2018: 7)

4. 各社のアクセントの定義

- K社：言葉によって、どこを高く、どこを低く発音するかということアクセントといいます。(K社：262)
- S社：単語には、その中でどの部分を高く発音しどの部分を低く発音するかというきまりがあります。(S社：194)
- T社：一つ一つの語について決まっている、音の高低の配置をアクセントという。(T社：22)
- M社：言葉の中にある音の高低。(M社：17)

5. 疑問点

aからcの特徴は、どれくらい教科書に反映されているのか？

aの高低アクセントのみ定義されている。

→b・cの特徴は記述されているのか？

6. 調査結果

表 各教科書のアクセント記述の比較

	K社	S社	T社	M社
①アクセントの単位	言葉	単語	語	言葉
②高低アクセントの指摘	有	有	有	有
③方言差への指摘	有	有	無	(有)
④文節単位への言及	有(ヲ)	無	無	有(ガ)
⑤具体例	箸・橋・端	c 雨・飴 暑い・厚い 箸・橋・端	石・医師	今・居間旗

7. 考察—教科書記述の実態—

- アクセント句の記述はほとんどみられない(イントネーションは肯否・疑問を表すものとして扱われている)。
- S社のみ、形容詞を取り上げているが、具体例のみで説明がない。
- I, 2から、「アクセント句」及び「品詞毎に異なるアクセント規則」については、ほぼ言及されていないといえる。

→アクセントの特徴を十分学習できていない

8. 新しいアクセント学習のために 教師が押さえておくべき観点

- アクセント句の概念は、どこからどこまでをひとまとまりの語句と捉えているか確認できるものである。 → 音読学習の際に有用である
 - 名詞のアクセントだけでなく、それ以外の品詞にもそれぞれアクセント規則がある。 → 帰納的また演繹的にアクセント規則を考えさせることができる
- ・以上の観点をアクセント学習に組み込んではいかがでしょうか

【参考文献】清田朗裕(2022)「中学校国語教科書のアクセント記述小考」『国語と教育』47、大阪教育大学国語教育学会、pp.35-44/日本語学会[編](2018)『日本語学大辞典』東京堂書店
【付記】本発表はJSPS若手研究20K13999(「文学以外の古典資料を活用した新たな古典教育教材の開発—推論能力の育成と共に—」)の助成を受けている。